



七
柏
集

五

中村俊定文庫
文庫 18
574
1





題俳諧七柏首

江東有一叟角巾野服哦於菰
蘆中聽其吟哦則非詩非賦又
非和歌風調可以寓意滑稽可
以解紛者蓋我知之矣是非世
之所謂俳諧者耶吾聞以俳諧
鳴一世者前有貞德後有芭蕉
自蕉葉之敗也不如經歲霜露



也其間一二題名字者亦寥
不耐秋矣是編也可謂輞川芭
蕉指存雪中矣上下百年比擬
七體種極變句：逼真猶尋
筆生擬古詩施每畏者現之十
三才也邪學諸戲也詩似未和
歌似且俳諧似丑淨今插身一
大場上色：皆演者誰居叟耶

非耶叟者為誰兒童誦蓼太走
卒知雪中葦固不待吾言矣

天明改元夏五
南畝子撰



七拍集序



心ゆくも今もあらずに仇討けさる
 世くもかたがたの河を渡る世は志は
 慶長との争もや花咲かぬ旅林一途
 宗通乃免許を、家々くくくり都鄙
 主風を伴く意永王保の民もまて
 満ちりし事や志のあまると其はハ
 されし河をたぐひし集りし

念中なる志をいし進ずることえんを
色慾をぬえ祿年中中にとて
花實のこころに備へしこころを
あまのこころに備へしこころを
忘れぬことえんを
中身一流の親も万人の心二人を
進へし心もたれやまじりな事
りし事及て人をもたれし事
の事

念中なる志をいし進ずることえんを
色慾をぬえ祿年中中にとて
花實のこころに備へしこころを
あまのこころに備へしこころを
忘れぬことえんを
中身一流の親も万人の心二人を
進へし心もたれやまじりな事
りし事及て人をもたれし事
の事

海

心さす川に中いもまををを
 えさるうまにうまあまは同らに
 しこの中なるもまををを
 うまををををををををを
 うまをををが建年なるに
 ちるまををををの人乃敢い
 好まん小過ををををやあるに
 同一志は人々々の巻が跡と

心を存百とりの流くや、向ま指利
 歌一も七指集とる、変化示す易
 ちる中や、いれぬるやある
 せ、あはれぬる道がまのふも、
 けれ、その度、まのまが、
 鹿の死鶴の母乃、徐き、法を、
 情、又、いも、
 ま、
 思、
 造、
 偶、
 ぶ、

托気も想商人の志や女らに
 さく花見にさうたをわらわ
 いまも柳のたけふおと
 心もつとつたわらわ
 心や用ひたつらん
 心くはひつらん
 さ、底をさうと際もさ
 りあふ今お塔籠の人の
 心よ

志が一筋のこころが
 思つる糸おひき
 小くくをさうと
 月やあつた
 かえらん
 海や人の心

凡例

一 獨吟あるつゝの事仙公りく其語を
 附言に述べてありしむとせむはけも
 貞治宗因次負みなりし栗の熟、初心の
 社中ニ結をし持ひるなりありあつて純
 りありしはや異端に及ん入地属し
 一 各々の字仙公西にありし一坐し結
 久遠よりして百卷百席を人をもつ

もあしは、等々、能回さの附句、おあ、んと
る、あ、人、と、お、なる、し、く

一 出、あ、ひ、ハ、長、既、凡、何、多、公、能、知
あ、し、従、お、も、い、く、も、何、と、能、く、の
る、あ、し、や、何、と、ん、志、の、し、その、所、合
際、と、い、たま、ん、よ、り、ハ、化、者、と、は、は、を
何、れ、と、古、人、の、之、種、よ、と、り、は、は、
句、の、好、悪、を、先、や、と、り、合、を、は、は、

用、於、ち、し、れ、し、も、何、を、り、し、し

一 四季のおは、は、し、り、先、以、く、乱、雑、し、り、ハ
一 お、も、御、ひ、し、た、く、歌、工、の、も、と、り、投、す、た、也
一 倭、漢、乃、縣、句、ハ、は、し、り、ハ、を、り、も、と、り、倭、ハ
之、縁、の、正、ゆ、を、い、ひ、は、は、は、其、名、子
古、東、府、に、以、乃、押、韻、を、し、あ、り、と、り、
其、久、の、盛、御、を、た、り、は、蓉、子、ハ、南、郭
先生、の、徒、京、極、高、明、子、あ、り、と、り

一 二十六番仙の一首を唯ぞかありし乃
 ちもほををついでいふふたは詠人の
 名を句のかしらをわたりてまじむ
 一 負介の翁句は仙連中此舞鳥又
 りいふ人あむさあよを補を
 しても其十う一をも揚ふりては
 のうらふ形とく一親疎を思ふ
 五つ〜あ

ち此條ふら乃今としよひを
 ちと藤う〜浦つとむ〜後ふら乃
 跡を〜とを〜紫のつをそのおま
 以〜んりめ〜し〜けなは麻れ
 何〜毛のあ〜し〜おを〜は
 卯の舞の雪に窓を照〜〜か
 述ふり〜と〜あり也

振〜亭三駱

指合歌十首

明心居士貞徳

仇妬ハ式目をあらわすおぼこふ
 和懐のおとく去場ふ離
 和懐ハ季志述懐旅同字
 まつあいの如くはらふとを
 けふといふおれはふ色を二句を
 七句をふふ句又句ハ三句を

少きや又おれハ神用
 まつあいの如くはらふとを
 名不圖神徳新教志
 述懐懐旧表平一を
 鬼女虎狼の千句り
 面平一を水ハ一望一句を
 新式の一望一句は二句を
 二句はあをハ三句を

三句何れもその四句何れも四句あり
面をこのくも又句もあへ
新式より一書と書かざる物
けり何れもその七句を去る
まより何れもその名や古き詞
げやれよふかハ一坐一句也

附言

抑擬古七言の形は其のまゝ
之語とあるも其の流は其の
是業を為さざるを奉むるあり
唯社稷のりくは其の形古く其の
ありしものたるなり夫風雅頌
既七一變而為離騷再變而為
西漢五言三變而為歌行雜體

四變而為沈宋律詩と云ふ
何れも實を先とし和を後とし和を
廿一代りかゝりて之の和を先とし和を
何れも實を先とし和を

何れも實を先とし和を

源頼義朝臣

後二位家隆

後二位家隆

あつらふはるのわが

あつらふはるのわが 契納言為家

あつらふはるのわが

あつらふはるのわが 西川法師

あつらふはるのわが

あつらふはるのわが 待賢院堀川

あつらふはるのわが

あつらふはるのわが

十七
七
七

孫の名入三子其月

又

一海を志す

一海を志す

一海を志す

一海を志す

一海を志す

一海を志す

一海を志す

一海を志す

一海を志す

一海を志す

一海を志す

又

一海を志す

一海を志す

古
七

五

又

海子村——示世堂の記

白き親仁紅葉村に送_レ聲_ヲ

魚の火氣 鮎_ヲ射_ル

再_ニ登_リ——て_モ虚_ヲ樂_ムを_モ若_クは_シ小_ノや_家子

白氏_ノ歌_ヲを_何心_をま_し山_ノ——櫻_林の

俗_ヲ語_ヲを_歌に

日_ノ影_ヲを_まと_した_るを_示成_に投_げて

河_ノ鮎_ヲを_如し_て作_らる

送_る代_ノ小_ノを_奏する

又

琴_を松_ノ入_るを_の心

楳_ノ入_る如_し影_を六十_の刺_す

所_ヲ胡_ラ望_るく_母を_東へ

其_ノ時_ノ入_る花_ノを_なや_うあ_まふ_は信_を給_ふ

ふ_の何_しな_しぬ_海の_から_もか_を有_て

画中小向あらしを演る樂舟
はらば

詠人我必きしわ

又山樂を聴く

鶯カケの心クキの曲カの心カの心カ

又

齡とて一に日大の松

海の小舟の女を逢ふ並に

卯月の雪を振る流波松

既身杜律入風を標と山樂の
寂とてしり幽齋の傳と人情を
現座を解んちりし心とてあ
何れも海を流る人よとてあ
旅しき海を流る人よとてあ
六甲を流る人よとてあ
さくらを流る人よとてあ

この国を治むるに先ず其記の撰あり

其の先ず其記の撰あり

其の先ず其記の撰あり

其の先ず其記の撰あり

其の先ず其記の撰あり

其の先ず其記の撰あり

又

其の先ず其記の撰あり

其の先ず其記の撰あり

其の先ず其記の撰あり

其の先ず其記の撰あり

其の先ず其記の撰あり

其の先ず其記の撰あり

其の先ず其記の撰あり

其の先ず其記の撰あり

其の先ず其記の撰あり

あはれなる御子の御事

又

上は御事御事御事

御事御事御事御事

御事御事御事御事

流し目にて御事御事御事御事

御事御事御事御事御事御事

岡祖と称は流し目のあはれなる御事
かゝる御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事

古きやまのりしむる花の花洞も
都の路の路もさるる荆棘の
さゆりあゆむるもさるる無き
路のりしむる家もさるる無き
松柏の路の路もさるる無き
さるる指もさるる無き
さるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるる

さるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるる

七拍

七拍

手ぬぐい粉書
あふるあふる母

朱歌坊小鏡佛

貞徳の心

蓼大

賢を以て連理の橋を貴妃梅
を以て比翼の華を不無の流
又を以て物由の道を行く
其のよきを以て徳を体する
日月は指さすの華を徳とし
其のよきを以て徳の輝く

ウ
ふふあ入号葉さ庵く胸のこも
所を指く控ぬ信録乃刷
赤きふ子ぬぬぬぬり十吉
富を様ゆ年先あり乃和
ふふふのふふふふふふふふ
讀の傀儡の始末つゝ
初めふふふふふふふふ
ふふ 月夜月ふふふふふ

天比是 舞臺の心算大勢
神を 計ふべし
さの 陰り 冷寒を 伊勢系
や乃 胸さ 色乃 後科
+ 信保 非も 仙露 也 能く 湯炎 年
空の 雲 裾 雲 其 振 袖
舞人の 意 十丈 何れ 花さりの 事
此 信 九 事 切 け け

西東小みんまこと命一あり
隠石とらるるを船のきとりのり
高き天竺のふちを浪よるる
唐の世界をみるに徳兵衛
二階のうらむと河を一部下のるを
人まの意の山路をくく
麻のふ月入細さるるを
山法をふむ埋む杖を

龍の尾をたきまはるる
ちやくちやく 小神を
控まはるる河を
口利とのまのびりの武者
酒を花はちやく鬼の城
湯を血をふまの夕陽

檀林の次

蓼太

おろかこもるるぬ都や 公望様
りかまもあまのめもむかひまを
酸醜年暮おき井戸を掘らん
裸く記し一書のみあつた
げしはくも月乃菊の盃人飲
花も毒しうな稲妻の寝

天帝ノまじりてあつた一朱
乙女の管弦雲小舟夕
ま五糸の標眉は惚くくもひん
江戸冬葉月あふくもあま
寺島幸齋屋富な〜えゆくと
雪のおち中をさげるとあま
神の本を何となく絶るゆき
すゝ痲積入念守眼の玉

大解^{シヤ}の泡を噴^{ホク}かきき
 石^{シヤ}鹼^{ホク}入舟や夕月^{シヤ}見^{ホク}人
 月^{シヤ}光の影^{ホク}波^{ホク}の粉^{ホク}乃^{ホク}波^{ホク}妻^{ホク}の事
 砂^{シヤ}と^{ホク}赤^{ホク}白^{ホク}小^{ホク}赤^{ホク}金^{ホク}也^{ホク}子^{ホク}人^{ホク}を^{ホク}ま^{ホク}
 +
 甚^{シヤ}重^{ホク}夜^{ホク}中^{ホク}七^{ホク}葯^{ホク}毒^{ホク}の^{ホク}医^{ホク}の^{ホク}事^{ホク}を^{ホク}辨^{ホク}
 志^{シヤ}の^{ホク}心^{ホク}の^{ホク}事^{ホク}を^{ホク}辨^{ホク}の^{ホク}事^{ホク}を^{ホク}辨^{ホク}
 乳^{シヤ}母^{ホク}の^{ホク}事^{ホク}を^{ホク}辨^{ホク}の^{ホク}事^{ホク}を^{ホク}辨^{ホク}
 多^{シヤ}化^{ホク}入^{ホク}小^{ホク}海^{ホク}の^{ホク}事^{ホク}を^{ホク}辨^{ホク}

町^{シヤ}の^{ホク}事^{ホク}を^{ホク}辨^{ホク}の^{ホク}事^{ホク}を^{ホク}辨^{ホク}
 多^{シヤ}化^{ホク}入^{ホク}小^{ホク}海^{ホク}の^{ホク}事^{ホク}を^{ホク}辨^{ホク}
 五十男^{シヤ}四^{ホク}女^{ホク}の^{ホク}事^{ホク}を^{ホク}辨^{ホク}
 少^{シヤ}陰^{ホク}入^{ホク}草^{ホク}分^{ホク}限^{ホク}
 能^{シヤ}と^{ホク}下^{ホク}の^{ホク}事^{ホク}を^{ホク}辨^{ホク}
 法^{シヤ}状^{ホク}小^{ホク}月^{ホク}の^{ホク}事^{ホク}を^{ホク}辨^{ホク}
 當^{シヤ}の^{ホク}事^{ホク}を^{ホク}辨^{ホク}

十ウ

西風

まふらんらんらん首を世らふ也
 軍 ちんちんちん 風多敷包
 お招の何あさしんや ぶ栢子
 ちんちんちん 舞く舞の袖
 何げねよ昔事栢のり花 莪
 道 舞も 雲 舞も 雲の舞心

次 顔の次

蓼太

白頭翁少年小亦 三曰ち 梅
 顔 色 惜とも 春と 之 人
 三法乃 徳を 高ぬれ 唯子高
 来ん よく と 思意なるる 月
 秋の空 不記乃 糸を 偷る
 裾を 幾 漸り 多子 漸 旁

拂々此處美女之おのを叫
 々々みのおのえん根牛房様を
 胡蘿蔔入細威壽菊の印不威
 元服いふふを入敷く
 を後世屋をまへく 十月月
 牛頭馬頭秤罪覺悽
 阿彌陀佛一とある一並入月原
 此の麻冷をいふ中のお

岫とよみか雲女と皂物と並く
 斗年一文さ端入跡
 山田磯と並く花小神寂在
 縁青うらむと又もまらも
 異國一屏風と並く八
 武烈の君と並く侍
 組板と並く鯉のふれ
 所を素女と並く體
 寫なり

万葉より傳ふる男まゝに伝祭
達方縁サリひと何しと出らん
芥心里如深山本と其江戸の人
雪片々々ふる。八節の夜原
鳥と叫き又海と物思ひ
不埒の田面月母養一
鬘ハシ髪を束り結ひ新世を
うん 物又めと召か

池子御抱る龜盃踐捧まぬ
仙家の千と世慢政を世に
孫も中々一枕を記され
七箇のつとて宝奥のつと
白馬より城下まで花のふん
る多々之つとて移る子あり

盧粟の以

蓼太

千く年削字極や君の歌大工
月何くくの中簾外の三寸
意衣る段の描入替ふれし中
何くく海あま史まゝの船
舟よきまど明使の使に探らん
風とともをよひ舟行子初霧

浪の釜中乃洞琴 海老さく
高のり言尾の端をねきり
何字挿入細眉男のやうにや
高知殿一 嶽門の教
あつ七日血涙の経と續く寸
推扇と作しえ柑の實をまじ
殿朽て月の光と何の終をま
七作のまゝ秋とまゝ

七拍二

九

歌老如吳天の雪を鏡とて
世を蜜人と思ひ捨つるや
荒河のく酒をい里をぬるるや
少と穿て羨すま 此庫
+ 聖徳の登る棟のまや 燈をく
衆をくまをくくくくくく
深き一椀をく 此のまをく
人とく 此の神の甲をく

箱崎のくくくくくく
ふりくくくくくく
まをく 此の神の甲をく
百鬼の荷をく 此のまをく
増す一里をく 此のまをく
世をく 此のまをく
八月の月をく 此のまをく
秋の月をく 此のまをく

箱崎

十一
人海を渡るの如く
小舟を走らす如く
多き舟に千五百人乗る
産山とて舟を乗る
是れ舟の如く舟を
舟を乗る如く舟を

續虚雲木の記

蓼太

舟を乗る如く舟を
舟を乗る如く舟を
舟を乗る如く舟を
舟を乗る如く舟を
舟を乗る如く舟を
舟を乗る如く舟を
舟を乗る如く舟を
舟を乗る如く舟を
舟を乗る如く舟を
舟を乗る如く舟を

抱神を授割るものなる事
下霜世をみまふ大命よはく
初ねるは長命をみまふ
河よりくさく切通し河り
むし一は葉平屋をぬ極口細
客冬女乃白きや乃水
花入小踊の河の如きは月
もも思ひ乃雲よ稲穂

昔をなほ流るる君の世に
八幡ぬを長く氏乃神垣
まがねや匂ひ乃花の匂
初春訓一乃自乃孫立
冬よりともなれぬ物なる
乱杭ゆき宇治乃我ひ
五懸水佛の首指ひはく
氷時いそなぬる多欠乃葉乃

大地をなす所可のまゝに幾くも
 うたをを捜中旅のむかし
 若草を山物ありと人をも
 人面瘡を酒りなると
 友誼くさくらの信子者簡
 京のくさくさ一旅草舎の月
 賤宿のまゝに法をくく小
 姉より 悲せは又ひるま

出酒のの春のまゝに
 運早くまゝに日記のふ
 経りたるまゝに流るる世
 歯ぬまをさくさく時
 一 雛子のりく花の
 是 勢をたのむるの

末来記の歌

蓼太

ふ雲の影 橋の如く 光の影
峰 言 夢 山 蔭 の 如
陶乃土 着^{スエタ}けと 縋 糸 女 言
押 何 ぐ 加 び け 報 魚 垂 け け
後 善 言 朝 風 凌 ぐ 袖 の 月
音 小 世 あり 後 輿^{コダ} 妻 あり 言

例幣の 伯くも 河 河 け け 言
上 ぐ 言 と 風 言 言 言 言 言
物 言 言 言 言 言 言 言 言 言
光 言 言 言 言 言 言 言 言 言
正 宗 言 言 言 言 言 言 言 言 言
言 言 言 言 言 言 言 言 言 言
片 言 言 言 言 言 言 言 言 言
言 言 言 言 言 言 言 言 言 言

七拾

七拾

むらぬ花江と笑止ま一人の
一とさしちさのさちちん
音は月詠入高腰を履き
舞う子僧のまきまき
おの⁺な若き舟入何の板
流るるさきまむのさ
船長やあはれむらむら
小判をい何ふまきまき中

三つをたふ酒の市もなむ
手とくくさうり音はあはれ
夕顔のつゆあはれを押し
うきあはれむらむら
本屋のさきまむらむら
音はあはれむらむら
歌あはれのさきまむら
汗冷くとあはれむらむら

七十一

七十一

七拾一
縮塚より八束の菊穂をもちて
みまきりて底を堰のふき
柳灯を月を灯もあらず吹消さず
傘さしうけて医者を伴ふ
其の柳を細戸を花のふき
と此處を菊のち余くり

炭俵の次

蓼太

古きよりめくりあつたのこめ
おとこをさねては席杖
喜の風曲空大鼓を何け持てる
おとこ入る菊のさしは片棒
さくくとあつた菊のさしは片棒
小鳥のさしは海静な如く

なりのとひを物とせしむるはあひ
かりやん深の年と干河
雲あり八音次第とて出
るるをそとに世にあらん
いしそやの借を授けしと
夕籙伝家門の書解板
月抄く世と記し及て佛
河内へ娘を母とてなまきぬ

おふとて何の者か深の橋おとす
干葉ふた鶴の書と。飯
喰花の日水と桃と多とあひ
久能入御山のととを
+ 控愛年三月朝の書とて
連ま川を和ら縁と出とて
二つ川を月代とてあ
組の油草とて法初時めく

七十一

七十一

七捕
 十
 此の如く伊勢の作次入所は
 飾きまきりや重のちくく
 碇小清舟をまはらぬ
 中 唾きり肩に膏を
 葉の如く礼帳にけりて
 月やむしりか来一組
 流舟も来儀にけり秋の
 浪をくわぬはりぬ出ぬ

十
 匠是る舟場の言葉押あり
 船陰の足も杖入さぬあり
 魚のこりこりも物も
 食のゆかり白に底も
 穢すゆえに掛ふ花も
 まの唇の求るまはら

月出

一 露之玉素也 自愛稱也
夜習名物也 迄中飯前也

高橋保士素筆也

色在物

素之玉素也 自愛稱也
夜習名物也 迄中飯前也
高橋保士素筆也

Handwritten text in cursive script, likely a letter or journal entry, written on the right page of the notebook. The text is written in a fluid, connected style.

Handwritten text in cursive script, likely a letter or journal entry, written on the left page of the notebook. The text is written in a fluid, connected style.

Handwritten text at the top of the left page, possibly a page number or a small note.

Handwritten text at the bottom of the left page, possibly a page number or a small note.

贈蓼太先生

片もよの御書は頼るゝも致さるや
す一何事は御書とて入るらん
昔の御書は御書とて入るらん
たまたま御書とて入るらん
す一何事は御書とて入るらん
昔の御書は御書とて入るらん
たまたま御書とて入るらん

宋の詩をよむ御書

かの御書は御書とて入るらん
宋の御書は御書とて入るらん
す一何事は御書とて入るらん
昔の御書は御書とて入るらん
たまたま御書とて入るらん
す一何事は御書とて入るらん
昔の御書は御書とて入るらん
たまたま御書とて入るらん

さよちんを〜と〜と〜と〜と
芭蕉大菴七物加三申

る首画二文書 同扶國書筆蹟日記

同一行物 同難波遺状

為雪手澤也意 同夢想再表八章

同建業碗強 為米入紙子書筆蹟画

秋八甲子お水お樹〜と〜と〜と

〜と〜と〜と〜と〜と〜と

きくのんは同志乃人〜と〜と〜と

草紙戸やあよ〜と〜と〜と

蓼太

あ〜と〜と〜と〜と〜と

人〜と〜と〜と〜と〜と

馬〜と〜と〜と〜と〜と

〜と〜と〜と〜と〜と

本〜と〜と〜と〜と〜と

水鏡の案入古きものよこし
 池田伊丹の舞て千あ
 をらくふはふ格入致し
 幣花くよき用ひてし
 廣くはききと揚き
 内を配取中欠ひし
 西ひ入致しとさ
 世と的もさか矢折か

虚舟 一兆 三駮 吏中 子兵 沙羅 菊 太

丁つらひは剥所入一う
 花より鳥の何喰うし
 夕やけの夜をこし月の
 をと解のあをくさか
 斑イカ壇カ維摩入後める
 漬梅之斗か子ふ納
 ありしはとせし
 婦入るやとせし

舟 中 兵 太 文 飲 鯨

降木の江をくぐりぬき
 舟は舟に舟を舟に舟
 一丈をくぐり舟に舟に舟
 舟に舟に舟に舟に舟
 舟に舟に舟に舟に舟
 舟に舟に舟に舟に舟
 舟に舟に舟に舟に舟
 舟に舟に舟に舟に舟

死 羅 母 舟 舟 舟 舟

舟に舟に舟に舟に舟
 舟に舟に舟に舟に舟
 舟に舟に舟に舟に舟
 舟に舟に舟に舟に舟
 舟に舟に舟に舟に舟
 舟に舟に舟に舟に舟
 舟に舟に舟に舟に舟
 舟に舟に舟に舟に舟

執 文 羅 太 舟

けしきと大乙鑑よ
めらつたうらみ

蓼太

文おのむ香ありら何月と梅
 暮多山 窓此 二言この四日 不塞
 旅人の金とあつとき 物たより 全
 湫動を乃さ かつらをたり 太
 然あつりた都より外に神をり 全
 奇あつらふ者たふる亦味暗 塞

宗澄らあま庭を小方足 全
 お葉と山を親らたてまつる 太
 空を危る松柱の本根を屋敷を 塞
 放生川乃橋を押よる 太
 秋風を舟に汗入る袖の月 塞
 居合能る古紙を月入稲妻 太
 畑はくは是燈所の末末通 塞
 狐入穴をま川子午乃日 太

古物と違ふも染たる為に
其居入金のさき物あり
石ころ花の園とさきあり
石徒物さきひの本さきか
不⁺平の力所をさきさき
縁組物さきさきさき
柳さきさきさきさき
ゆきさきさきさきさき

騫 太 騫 全 太 騫 太 騫

新さきの浦さきの風さき
果さきさきさきさき
ゆきさきさきさきさき
さきの雪さきさきさき
常盤さきさきさきさき
さきさきさきさきさき
ゆきさきさきさきさき
ゆきさきさきさきさき

太 騫 太 騫 太 騫 太 騫

只^{ナリ}もよりの物^{ナリ}もよりの二合^{ナリ}もよりの
 移^{ナリ}後^{ナリ}多^{ナリ}り^{ナリ}の感^{ナリ}角^{ナリ}策^{ナリ}の台^{ナリ}
 小^{ナリ}御^{ナリ}門^{ナリ}と^{ナリ}善^{ナリ}心^{ナリ}の^{ナリ}後^{ナリ}よ^{ナリ}通^{ナリ}く^{ナリ}
 ま^{ナリ}の^{ナリ}心^{ナリ}の^{ナリ}心^{ナリ}の^{ナリ}心^{ナリ}の^{ナリ}心^{ナリ}
 着^{ナリ}の^{ナリ}心^{ナリ}の^{ナリ}心^{ナリ}の^{ナリ}心^{ナリ}の^{ナリ}心^{ナリ}
 中^{ナリ}家^{ナリ}康^{ナリ}の^{ナリ}心^{ナリ}の^{ナリ}心^{ナリ}の^{ナリ}心^{ナリ}
 太 全 太 全 太 全 太 全 太 全 太 全 太 全 太 全

環流亭真行

蓼太

石川^{ナリ}や^{ナリ}あ^{ナリ}を^{ナリ}尋^{ナリ}多^{ナリ}方^{ナリ}の^{ナリ}目^{ナリ}
 網^{ナリ}追^{ナリ}あり^{ナリ}く^{ナリ}里^{ナリ}子^{ナリ}控^{ナリ}子^{ナリ}を^{ナリ}控^{ナリ}
 梨^{ナリ}如^{ナリ}の^{ナリ}心^{ナリ}の^{ナリ}心^{ナリ}の^{ナリ}心^{ナリ}の^{ナリ}心^{ナリ}
 折^{ナリ}の^{ナリ}心^{ナリ}の^{ナリ}心^{ナリ}の^{ナリ}心^{ナリ}の^{ナリ}心^{ナリ}
 山^{ナリ}を^{ナリ}の^{ナリ}心^{ナリ}の^{ナリ}心^{ナリ}の^{ナリ}心^{ナリ}の^{ナリ}心^{ナリ}
 旅^{ナリ}の^{ナリ}心^{ナリ}の^{ナリ}心^{ナリ}の^{ナリ}心^{ナリ}の^{ナリ}心^{ナリ}
 太 全 太 全 太 全 太 全 太 全 太 全 太 全 太 全

人申く齋喰ふまての雲衣
 世も種もくまもあまも
 縁組の場と歌をうへり
 伽羅と流る歌皆相なり
 おきこひし枕ありもあまも
 前橋歌をうへり次への浦
 萩吟く君の目見もあまも
 比野を守り申六十の秋

北 丈 太 羅 丈 北 太

中河ふおまめ村の及くま
 内君寶り玉の之さし
 片初歩の解るる流衣
 群婦くといさうけり
 けさる歌と雪溜の水の歌
 力也を忘の山よえあまも
 元政の歌ふ歌乃母まもり
 とか歌りしと替もらふ

北 丈 太 羅 丈 北 太 羅

通一矢のきを射とせき
 莞り可言く子親の曙
 象よ憂祝神の象見よ人
 班治ら思ひの樹ぬ日と柳
 さくせく板まのうきを愛する鞋
 多海海ひきの象智のま外
 得交て月个の門入茶元
 摩斗法整之——葉張る冠

太 北 太 北 太 北 太 北

ナリ

帆ふ十里隣多きこの秋の風
 縁をとくけと骨牌の海
 間まむ一む雀揚は腐
 いつら亭るふ女す中一り
 扇指ひおきさこも花入位山
 比交のき中胡蝶り

太 北 太 北 太 北 太 北

芭蕉菴真行

蓼太

蓮の葉も水も月もぬ雨も音
 櫛吹あまきききき曙 東舎
 助也子傳子あるあつく小 揚江
 硯もく川のるま阿りくさき 萬都
 名月も影もぬれぬあつりあ 舎
 〇ーさーさーさーさーさーさーさー 江

肩もさすも妹も音も鳴もりあ 都
 経実也ーと冷りぬあーろき 太
 今ホー熊のあはは法子ー 江
 まー雪がら松入夕照 舎
 五挺河のゆゑるあまききききき 太
 五挺入あま入四挺出あま 都
 花也ーを後中急のるあー 舎
 夜す入葉内子程てさー 江

三十一

淋しも終焉乃勤の概さる
 川ふも下り花乃三強
 河也於借免月能夕嵐
 蚕功者よ依母の道留
 清書乃應受祓るのて歩もは
 於造り出も五月る入町
 日暮てさ千人切とあうふ
 帯隠し進こ自を合ひ恋
 太 都 舍 太 江 都 太
 太 都 舍 太 江 都 太

一理居在女能是飯なり
 か〜仲なまき 嘗入美
 陶う〜かたふく小忍ひゆ
 後うけ多る乃厄位の掃除日
 了る乃人進て轉子斗乃大鏡
 い〜くを金よとる〜の米
 客とふかあまあ〜月能月
 ち〜 隠さく七夕入鞠
 太 都 舍 太 江 都 太
 太 都 舍 太 江 都 太

燕トリス 弘余波多トリス 教柳 都
 玉振トリス 三ヶ多トリス 塔一トリス 江
 松トリス 明をトリス 上トリス 下トリス 三トリス 舎
 鯛トリス 百トリス 投トリス 三トリス 弘トリス 飲トリス 三トリス 太
 大正舞の常盤くトリス 江 都
トリス

寄巢菴真行

寶川や小舟トリス 小所トリス 七トリス 三トリス 梨 蓼太
 秋さくトリス 暮トリス 冬トリス 忍トリス 冬トリス ぬトリス 暮トリス のトリス 折 鳳宿
 雨トリス 僧トリス のトリス 履トリス 冬トリス 終トリス 冬トリス 月トリス 終トリス 下 虚舟
 芥トリス 林トリス 野トリス 山トリス 舟トリス 野トリス 舟トリス 蘭室
 志トリス 野トリス のトリス 三トリス 友トリス 終トリス 冬トリス 終トリス 冬トリス 宿
 出トリス 野トリス 舟トリス とトリス 鳴トリス 舟トリス とトリス 舟トリス 飯 太

かしらるるのふりてはるるをいかに
 誰いふらふかき徳の戯き徳
 使者をれく徳をいぬ鼻色扱
 祝詞海きる幣 洗 策
 松明の何きふ方山さる
 ま川安塔きる連の云借
 懐も秋さきく歌借望友
 策さほの月と白くなく

室舟太 宿舟室 太宿室 舟宿太 室舟太

かしらるるのふりてはるるをいかに
 たさきさきなる少毒の里
 号子あさきき方記り垣
 ちりり中家と行きまきり
 老の目と新書のかすあとも
 いまよはるるぬ 河内侍
 積よきと花ら三年乃麦像
 乃ききと地の新折く

室舟太 宿舟室 太宿室 舟宿太 室舟太

雪梁館真行

蓼太

寒元き大入道の紙衣は
糸手友の糸糸糸糸糸糸
糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸
糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸
糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸
糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸
糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸
糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸
糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸
糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸

松隣 富屋 茂林 野莊 故流

夕の秋乃片散詣を老史姉
陰如む舞うお何一二筋
村乃小捷是うけく是是の
横よ一艘五火力船
能くは飯の質入船と是道
従いさとおこま記年針
料ふとも鼎と加るまはるは
行麻うけま雪糸長陣

隣太 流莊 屋林 太隣

方丈の影もよみなき加帳
 院中をうらむと河をる月
 初花の枝をさしとあり
 丹波く梅も麻衣を糸
 馬のしる平家も乳柳も
 縁も連音初る牡丹候
 指袋も糸衣も向子より
 赤安窓のさめも冬拈
 流林太屋莊

玉章とてけとて川衝
 我さく笛孔秘曲感る
 齋中まで階文さるる鼻
 高麗花より挿さるる言間
 吹さるる蹄よとむ古厚あり
 斤もさかちも柿の室中
 市早も月夜をさしぬ
 いとふもさしぬ撰集乃秋
 屋太隣流林莊

ナリ
 田舎子味暗と三途入客と
 厚風よかろぬ海流
 逗留の都へと解下
 芝米形くもお宿まこころ
 小並あふも少も花の交者
 横くともさくらも咲以

花隣太屋流林

蓬萊菴真行

扇くぬ梅くぬの日和式
 山浦出家甚か旅人
 先隣る友をむしよの家建て
 風鈴の音残寝るよ流る
 松蔭子立中る月の宿り
 新の柳くも舟入る家来

蓼太

亀二
 鱗江
 李桃
 文雅
 太

唯つまは浦津の宮の宿
人相書とよみ男たり
結さふり多すむ夕す
馴る批乃菓子冷まを
芥のぬ杉ありの神の物
雨うもや湯にや下るく
月の中まゝと扱す乃菜
を底小袷の室とよみ

江 雅 二 太 桃 江 二 雅

^{ナラ}心まよとくと新乃喰
人おとろぬ城下に
音ひさる千束の乙の
おと馴る親仁たり
物為る屋菜の花の
先り子限り手始百軒

太 桃 雅 二 江 執筆

修多羅閣 眞行

蓼太

ふやあう秋より涼き極る

目まじりしはよき時 曙 三蘭

妻に風吹きの贈松子踏つきて 全

清らきと無き目見百姓 太

七葉ふ唇もあはれむ 全

霜の雪の夕景 蘭

日孔の標子梅津桂川 全

あまやあまの尋あはれ 太

さくらさくらあはれ 蘭

菊のあはれ 太

赤い車輪の縁を巻くし 蘭

目わきし帆をかたる地あり 太

山をくぐりて大坂の境あり 蘭

花をぬきし白頭花秋 太

七拾二

四十一

中阿まおの山房も武士も女もせ
 をと歌をそそのりし浪元のいさことの
 曲もあはれさるる花もさぬると
 去るまきの乃庵のいふもてもるる
 糸抱子様子と下はあはれさるる
 歌も川ぬれ乃日と斜之
 痛まよふ歌もあはれさるる下相
 津波もあはれさるる元のいさ
 蘭 太 蘭 太 全 蘭 太 蘭

二日何と人との通子泣屋 太
 積ま茶粥乃指菊とさるる花も
 備女の糸子なまらむと花も
 去るまきの乃庵のいふもてもるる
 繫る絶ひ山縣馬場耳利 太
 結伴もあはれさるる年の多きやめ
 中垣乃積まのいさ月のお
 好あはれさるる秋乃風とさるる
 全 太 蘭 太 蘭 太 蘭

十

十

菊 菅と雪をさくさく初念心
 ぬると 瑞炭は初念の仕合
 投出さす 細乃月利のむし
 七つ下りの 暖々 捲 不
 烟 別々 井の 蛙も 花の 実
 黄なる 乃 巢も 乙 乃 の 巢も

菊 太 菊 全 太 菊

出二亭真行

青乃之のく 降をさるる 藤 是 心
 急をさるる けと 山の 踏乃 月
 難 物乃 門の 友舟 博乃 せ 乃
 糸とむと 包乃 子 乃 乃 乃
 鯉乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

蓼 太
 大 磨
 可 候
 知 足
 素 好
 夫 水

七箱

七箱

年も漸之日は花信ひ 宜麦
 勤ぬ酒をさあたるく 太
 脱之々里みよの所被 磨
 しき 四花よりと初瀬踏音 好
 標 咲おむさよなるまゝの 足
 阿やめ暮るる花の茅門 麦
 暮るおのれ 征まかろふ 依
 既痛とさし 逝向もれも 水

暁舟の糸は秋藤をうきく 太
 月 細くと雲若 好
 衣入るまゝの 機はるる花衣 足
 ふるも早の 繫おはる用 依
 海さるる 中浪のまはれを 水
 神子出るまゝの 舟をさる 磨
 舟まゝの 舟をさる 麦
 かゝるまゝの 舟をさる 足

三十四
 三十四

七十一
むと千能候揃乃火の冬牡丹
二代候いそふ世乃玉登
口候ふ入にふより一物面く
獲けけさるる馬忠末公吉
う流しと子故子床を記出り
玉うきとさくら紅葉の對
幼親まきのほおの成り月乃あ
樽とらとら一層のよらとら

好 麦 磨 足 水 依 太 好

ナ
入子松のまの又人ま
おもあまましゆと子の蒼一
都のめり鼓折ぬ
花より周冬よりまの日本有
那の利色一細魚隊金

執筆 太 麦 水 依 磨

夜柱菴真行

蓼太

推案やと京まてと矢智孔家
 弁ふあそ所 忠ら折風 一得
 蒙求中 論語の徳を居代て 桃長
 袴 さとくさも折のささささ 盤中
 月とささくさ事人の案の果や以 得
 孫系ふ 操戸中 枝折戸 長

相お北とこの就ぬげの勢ゆはは備 中
 二飲のらゆさお感あつさる 太
 互うさ押さ休はさ陸躍 長
 仙間を借てさ味さる 嬰児 得
 炎点乃殺ひも終すかさ向り 太
 むすくゆる 磨斗の道と初瓜 中
 月夜一 村雨寒さくさるさささ 長
 急り依見のお私おさるさ 得

横山 四十六

碎さめ乃子茶碗玉漬ふあ一ツ
 至子能上よあふく桃の日
 燭臺と千本の花を愛うよ
 志んと紙写子能を愛する
 次佐の母ととどろも生ら
 墨の色尺さる紙も忍ぶ
 烟鳩の依羅子別るまの葉
 卯月くも空の楓梅檀
 中 得 長 太 中 得 太 中

口あけ包く三輪の智乃鹿海り
 救珠法まくりくま向り帯
 三夕よも舞くとあをまなま
 湯あふくくまへく門のまな
 時局降るまへく初敷るまのま
 手あけ披き手後筋をよる
 我れり実おきこまき初月日
 曲実むやうふかくなり危
 太 中 長 太 得 中 長 太

寛治通子おきかたを扶策
 吸との辛しよ女臨梅
 研まじく縁の廣斗包
 妙まじくおき磨をこし
 控ぬすは中書部屋乃中控
 志はもふ月と唯ふり
 志はもふ月の御まき乃指
 舍 壺 壽 太 橋 壽 壺 舍

舟縁をいしてと道る破の波
 祈幸車らまじくをたり
 嘯もさかた花の兵女や舞
 流るまじくおき日永若き
 赤き一紙は菴書乃まきの扇
 阿な音をさし揚敷こつ
 松柏あうきおきの星を阿り
 是をふ旅もの小具是乃候
 舍 壺 壽 太 橋 壽 壺 舍

七拾三

四十一

是のまをけと鹿ひとつ鷲一
 何れもと云ひ只のまぬ急
 橋場より憂愁を重き言
 挑灯動くまゝ空の中
 碁依らまゝいづく書摺ま
 大姐板より裡の眼かく
 御座船の幕吹月かき離
 雲より出むらゝ我國の山
 壺 舎 橋 壺 舎 太 橋

やうくと傳板の茶搦何より
 正しくや月影をうらや
 搦場より炬の茶を煮あは
 何の葉く魚と百とあまきけ
 後尾を記の花笠を四人
 おとせ文人むらと自
 壺 舎 橋 壺 舎 太 橋

不_レ限_一の_レ猶_一も_レの_レ何_一も_レの_レ道_一
雲_一水_一共_一悠々

太_一蓉

や_レ月_一滿_一金_一ま_一と_一二_一百_一十_一日_一ま_一ま_一事

太_一蓉

青_一楓_一入_一悲_一秋_一

全_一蓉

⁺君_一不_レ見_一宋_一玉_一作_一賦_一年

全_一

涉_一有_一し_一ふ_一の_一痛_一き_一涙_一を_一り

太_一蓉

短_一褐_一渾_一負_一當_一壚_一邊_一

太_一蓉

松_一魚_一年_一は_一き_一ふ_一玉_一川_一の_一あ

太_一蓉

願_一以_一歌_一舞_一答_一聖_一代_一

太_一蓉

岨_一乃_一小_一松_一と_一松_一の_一あ_一る_一乃_一甲

太_一蓉

積_一雪_一當_一是_一含_一春_一烟_一

太_一蓉

焉_一の_一も_一を_一松_一と_一晴_一き_一組_一討

太_一蓉

慷_一慨_一撫_一劍_一明_一月_一下

太_一蓉

秋_一の_一あ_一る_一の_一城_一崎_一の_一友

太_一蓉

張_一柿_一梁_一梨_一園_一中_一連_一

太_一蓉

鞠_一す_一く_一と_一鹿_一登_一る_一あ_一る

太_一蓉

乘^テ醉^ニ馬^一上^ニ抱^ニ琵琶^一 菴

阿^ハ多^タ摩^マ多^タ摩^マ多^タ摩^マ 湖^ノ縁^ニ 太

十^一山^ニ遙^ニ控^ニ指^一掌^ノ前^ニ 菴

為^シ斛^ノ子^ヲ列^シ 踏^キ出^ス 太

珠^一樹^ノ花^ノ開^キ 蓬^ノ菜^ノ上^ニ 菴

長^シ山^ノ窟^ノ 寶^ノ寶^ノ 船^ノ 太

芭蕉菴真行

秋^ノ風^ノ如^ク 夕^ノ光^ノ入^リ 菴

夕^ノ光^ノ如^ク 秋^ノの^ノ光^ノ 菴

相^ノ横^ノ 軒^ノ 菴

さ^ハあ^ハと^ハ 菴^ノ 入^リ 菴

代^ノ 菴

吾^ノ 菴

菴

菴

菴

菴

菴

菴

松崎の家跡を是と撰付布
由海を由免と班子とある
武庫を於て風を由船頭を
伊勢を荷とては神在と
女と多とて心とある
猿と河と由安を兼てある
安載の衣が是と花らり
かきし、縁のきりり 入る

太 國 文 太 國 文 太 國 文

海を由て心とある
廊下を由て心とある
忍月の草を由て心とある
花を由て心とある
少海を由て心とある
位牌を由て心とある
舟を由て心とある
二貫を由て心とある

文 太 國 文 太 國 文 太 國 文

行拂ふていふことす六月
敷書屋より十日に渡り柳葉
耳かきいふ言出の爲事なり
あはれいふこと高尾はなり
御後さし置かぬことなり
とていふことなり
曉入推し志す、秋若月
昔もさし置かぬ言入續經

大國文太國太文太國太

新書夏の間いふことなり
やゝあはれいふこと申書の一乱
さし置かぬことなり
浪さし置かぬことなり
降さし置かぬことなり
仰さし置かぬことなり

大國文太國太文太國太

1111

舟系入喜と申使此に世界
 鳥居子花入何を来一
 厚風呂の棧垣吹多々織と新
 角力入後とかくをの妻
 腰上げと臨幸海入と申あり
 程系津と多々く牧の何と馬
 或と記と十瀬と申と川
 又あり寸海小冬と申と川

足 太 守 足 太 守 足 太 守 足 太 守

空煙小車の火桶入のり
 舟と一食と馬群わ
 籠喚入とのりかをる松と我の
 宇治く福轉此系と富と
 月と山と月と山と月と山と
 景と山と山と山と山と山と
 守と山と山と山と山と山と

足 太 守 足 太 守 足 太 守 足 太 守 足 太 守

